

「あの方に語りかけるのだ」

山下慶親*

四十三年前の一九六六年、私は高知県の高校を卒業して、東京の大学に進学しました。高知に帰省するたびに善通寺駅を通過していました。瀬戸大橋の完成よりずっと前のことです。宇高連絡船から土讃線に乗り継ぐ僅かな時間に、高松駅構内でうどんを食べていたことを思い出します。大学では、入学後すぐに大学教会で洗礼を受けました。洗礼を授けてくれたのは、四国学院大学で数年間教えた後、国際基督教大学に移っていたジョン・O・バークスデール宣教師（在職一九五四〜六一）でした。四国学院と私の関係は、その時から始まっていたと言えるかもしれません。私は三年半前から理事長となっていますが、創立六十周年を迎えた四国学院がキリスト教を建学精神とする大学として今後も発

* Yoshichika YAMASHITA 本学理事長、日本基督教団熊本草葉町教会牧師。

本稿は、（汝らは地の塩である）というテーマで、理事長が講師となり、三日にわたって開催された秋季キリスト教強調週間、第一日目、二〇〇九年一〇月二七日（火）の講話である。宗教改革記念日を控え讚美歌二六七番「神はわがやぐら」を共に賛美し、聖書箇所としては、ヨハネ福音書一六章三三節、ヘブライ人への手紙二章四〜七節を拝読した。（編者注）

展していくことを心から願っています。

一 キング牧師との出会い

昨年のこの時期、アメリカは大統領選挙で熱気に溢れていました。黒人初の大統領が誕生することへの大きな期待が膨らんでいたからです。結果として、「チェンジ」「イエス、ウィー・キャン」というスローガンで、バラク・オバマが圧倒的勝利をおさめました。しかしアメリカの歴史を振り返ると、チェンジを生み出すことは、とくにアフリカン・アメリカンにとつて、どれほど困難であつたかを思わされます。なぜならば奴隷制と人種隔離による長い差別の歴史があつたからです。

オバマ大統領が誕生した重要な背景の一つに、マーティン・ルーサー・キングJr.牧師の存在がありました。選挙キャンペーンでは、しばしばキング牧師の映像が映し出されました。とくに彼が首都ワシントンで行つた「私には夢がある」という演説が繰り返し流されました。四十数年前にキング牧師が夢として語りかけたことが、黒人に力を与え、白人の心を変えて、黒人大統領誕生をもたらしたと言ふことができるでしょう。

私はここにキング牧師の写真集（チャールズ・ジョンソン、ボブ・エイデルマン編『私には夢がある キング牧師フォト・ドキュメント』山下慶親訳、日本基督教団出版局、二〇〇五年）を持ってきています。四年前に翻訳して出版しました。図書館にも入っていますので、ぜひ手にとつて見てほしいと思つています。なぜなら私は、学生時代にキング牧師に出会つたことよつて生き方が方向づけられ、牧師の仕事を目指すことになつたからです。

大学三年生になつた春休み、私は大学の宗教部が主催する二泊三日の修養会に参加していました。その時、キング牧師暗殺のニュースが流れました。当時、私は卒業論文で何をテーマにするか決めていませんでした。暗殺のニュースがきっかけとなつて、私はキング牧師に関心を抱き、彼のことで卒業論文を書くことになりました。なぜ私がキング牧師に関心を抱いたかと言いますと、社会改革者と宗教改革者という二つの姿を見出したからです。キング牧師は人種差別

という巨大な悪に立ち向かって、アメリカ社会を変革していきました。そういう点では、明らかに社会改革者でした。それと同時に、人種差別を容認していた白人教会のあり方にも立ち向かいました。そういう意味では、アメリカ教会の改革者、宗教改革者でもありました。今週の土曜日は一〇月三十一日で、マルティン・ルーターによる宗教改革の記念日です。先ほど一緒に歌ったのはルーターが作詞作曲した讚美歌です。キング牧師は、ルーターに因んで付けられた自分の名前にふさわしい生涯を残したと言うことができます。

一 アメリカ留学

私は大学卒業後、牧師になる勉強をするため、アメリカ東部メーン州のバンゴア神学校に留学しました。最初の二年が終わった夏休み、南部ジョージア州アトランタの病院で研修を受ける機会が与えられました。その夏のアトランタ滞在が、私を黒人社会に近づけてくれました。偶然ですが、この時、四国学院で心理学を教えていた井上哲雄先生（在職一九七六～八四）が在外研究で同じ病院におられました。アトランタでは、月曜から金曜まで病院チャプレンの研修を受け、週末はキング牧師のお父さんが牧師をしている教会の礼拝に出席し、キング牧師が会長をしていた南部キリスト教指導者会議という団体の事務所に入りました。そしてキング牧師の側近であったホセア・ウィリアムズ牧師にくっついて、アトランタ市長の選挙運動を手伝ったりしました（この選挙で初めて黒人市長が誕生しました）。

当時は一ドルが三六〇円でした。キング牧師のお父さんは、日本から来た留学生の経済状態を心配してくれたのか、彼の副牧師と一緒に芝生を刈るアルバイトをさせてくれたこともありました。私はアトランタが気に入ってしまい、神学校卒業後はアトランタに戻ろうと決心し、総合病院で牧師のインターンをする内定ももらいました。この時には、徳島で宣教師をしていたことのあるウィリアム・ボイル牧師のお世話になりました。しかし人生は分らないものです。一年後、私はアトランタに戻りませんでした。神学校を卒業する直前、東京の出身大学の教会で一年間働いてほしいという依頼が来たからです。その後は、東南アジアのタイに初めてキリスト教主義大学ができたので、チャプレンとして

赴任することになりました。こういったことで、アトランタはずいぶんと遠のいていました。

しかし不思議なことに、アトランタとの関係が全く切れてしまうことにはなりません。というのは、日本に帰国後、大学で二年後輩の友人にアトランタの黒人神学校で勉強することを勧めたからです。それが、四国学院で現在学長をしている末吉高明先生です。学生時代に書物を通してキング牧師と出会ったことから、私はいろんなことへと導かれました。四国学院の皆さんの場合も、学生時代の出会いから予想もしていないことへと導かれていくでしょう。

三 バス・ボイコット

キング牧師に関して、私が最も尊敬していることがあります。それは、彼が困難な課題から逃げなかつたことです。彼は黒人社会に生まれ育つた者として、また黒人教会の三代目の牧師として、黒人社会の苦しみを担おうとしました。キング牧師は大学と神学校を卒業した後、ボストン大学の博士課程で学び、当時の黒人として高学歴を得ました。そのため、人種差別が渦巻いていたアメリカ南部に帰らない選択をすることができました。北部の大学で教えるという道もあつたからです。しかし、彼は自分を育ててくれた黒人社会と黒人教会に仕えるため南部に帰る決心をして、アラバマ州モンゴメリの教会に赴任します。

四年前、その教会を訪れたことがあります。会堂の規模は大きくありませんが、州議会議事堂の目の前に立っています。二十五歳の青年牧師キングは、南部へ帰る困難な道を選んだのでした。そして牧師就任一年後の一九五五年一月一日、彼の名前を歴史に残すことになるバス・ボイコット運動が始まったのでした。

バス・ボイコット運動は、ローザ・パークスという名前の夫人がきっかけでした。彼女はデパートで縫い物をする仕事を終えて帰宅するため、市営バスに乗り込みます。モンゴメリのバスは人種隔離されていました。それが社会の制度であり、法律で正当化されていました。運賃は同じでも白人は前の座席、黒人は後ろの座席が指定されていて、白人席が満席になれば、黒人は席を譲らなければなりません。パークス夫人は白人乗客が乗り込んできた時、白人運転

手から席を譲るように命令されます。しかし席を立ちませんでした。このことで彼女は直ちに警察に逮捕されました。これに対して、黒人社会ではバスをボイコットすることが呼びかけられました。

一二月初めてでしたから、アメリカ南部でも寒くなっています。クリスマスを目前にして、教会にも街にも讚美歌が流れ始める時です。そんな時期に、黒人たちは市営バスの差別撤廃を願って、バスに乗らない運動を始めました。その一方で、白人たちは何ごともないかのように教会の礼拝に出席し、救い主イエスの誕生を祝う讚美歌を歌っていました。クリスマスを祝うことの本当の意味について考えさせられないでしょうか。

当時、アメリカ南部ではバス、列車、学校、公園、図書館、レストラン、水飲み場など公共施設における人種差別がまかり通っていました。パークス夫人の逮捕をきっかけとして、モンゴメリの黒人社会は結束して立ち上がります。人々はまだ我慢できなくなっていたのでした。キング牧師は二六歳でしたが、運動の指導者となる責任を負わされます。

バス・ボイコットは一年以上継続しました。運動を支え続けたのは、黒人大衆でした。彼らは雨の日も風の日も、暑い日も寒い日も、職場に通うため長距離を歩いたり、自家用車を出し合ったりしました。車に便乗するように声をかけられても、それを断って黙々と、子どもや孫たちの将来の自由のために、尊厳を持って歩くおじいさんたちやおばあさんたちがいたのでした。

現在の私たちは、差別はいけないことだと当然のように思っています。しかし、モンゴメリの黒人たちが置かれていたのは、人種隔離による差別が法律で正当だとされている社会でした。経済的には貧しくされ、教育を受ける機会が奪われ、政治的には選挙権がなく、社会的・文化的には見下されている中で、いったいどのようなようにして社会を変革する手段があったのでしょうか。昨年、バラク・オバマ大統領候補が「チェンジ」を呼びかけましたが、チェンジを呼びかけることさえ困難な時代でした。そのため、黒人たちが人種隔離バスに反対して取った手段は、ただ単にバスに乗らないという実に穏便な方法でした。市営バスに経済的打撃を与えて、少しでも平等を勝ち取ろうとしたのでした。

四 キッチン・テーブルの祈り

しかし、いくら控え目なボイコットでも、差別主義者たちを刺激しないはずはありませんでした。なぜならばボイコットは白人優位の社会に楯突く行動であったからです。運動が長期化していく中、キング牧師は警察当局に逮捕されます。しつこく続く匿名の脅迫電話を受けます。やがてキング牧師の心には、自分に負わせられた重い役割からどのように逃られるかという思いがよぎるようになります。しかし彼は困難な使命から逃れませんでした。この点が彼の偉大であったかと思えます。それでは、青年牧師キングはどのようにして、指導者として立ち続ける勇氣と力を得ていたのでしょうか。私たちは黒人教会に息づいていた信仰について考える必要があります。

バス・ボイコットが長引く中、人種差別主義者たちの脅迫は真剣味を帯びるようになり、キング牧師の恐怖心も募り始めます。当時、クー・クラックス・クラン（K・K・K）と称する人種差別団体の活動が活発でした。彼らは全身を覆う三角頭巾の白装束に身を包んで、黒人たちに集団的暴力を振るっていました。

ある日の深夜、キング牧師は脅迫電話を切った後、恐怖心がピークに達します。全く眠れなくなり、ベッドから起き上がって台所に行き、コーヒーマシンを温めます。彼はあきらめかけていました。臆病者のレッテルを貼られずに、運動からうまく身を引く方法を考えたりしていました。妻のコレッタや幼い長女の身の安全も心配でした。なぜかと言うと、何度もかかってくる脅迫電話は、妻や子どもがどうなってもいいのかと不気味な声で繰り返していたからです。キング牧師は全くの無力感の中で頭を抱え込みます。しかしこの時、彼は不思議な体験をすることになります。なぜならば自分に語りかけてくる一つの「声」を聞くことになるからです。その「声」はキング牧師にこう告げたとはいいます。

「お前は今、父親に電話してはならない。母親に電話してもならない。お前はただかつてお前の父が語ってくれたあなたの方に語りかけなければならぬ。道なき所に道をお作りになるその方の力に語りかけるのだ」（クレイボーン・カーソン編『マーティン・ルーサー・キング自伝』梶原寿訳、日本基督教団出版局、二〇〇一年）。

かつて「父が語ってくれた〈あの方〉」とは誰のことでしょうか。また、「道なき所に道をお作りになる方」とは誰

のことでしようか。それは説明するまでもないでしょう。子どもの時から家庭や教会で教えられてきた神のことです。父親に電話して助けを求めてはならないし、母親に電話して相談してもならないというのは、どういうことでしょうか。それは、自分が今直面していることについては、自分自身で解決しなければいけないということです。そして、このような時にこそ「あの方に」、「道なき所に道をおつくりになる方に」、すなわち神に、語りかけなければならないということです。

この「声」を聞いた時、キング牧師は台所のテーブルに頭を伏せ、声を上げて祈ったということです。この時の祈りは後に「キッチン・テーブルの祈り」（台所の食卓の祈り）と呼ばれることになる有名な祈りです。彼は恐怖心と孤独感の真つただ中で、次のように祈ったということです。

「主よ、私はここで正しいことをしようとしています。私はここで正しいと信じることに立ち上がっているのです。しかし主よ、私は告白しなければなりません。私は弱いのです。私は倒れそうです。勇気を失いそうです。そして恐れています。だが、私は人々にこんな私を見せたくありません。なぜならもし彼らが私の弱い、勇気を失っている姿を見るなら、彼らも弱くなってしまう。人々は私に指導力を期待しています。だからもし私が力と勇気を失ったままで彼らの前に立つなら、彼らも倒れてしまいます。私はもう力の限界に來ています。もう何も残っていません。もう一人で立ち向かうことはできません」。

この時の祈りにおいて生じたことを、キング牧師は次のように記しています。

「私は内なる声の静かな励まし響きを聞き取ったように思った。『マーティン・ルーサーよ、大義のために立て。正義のために立て。真理のために立て。見よ、私はお前と共にいる。世の終わりまでも共にいる』」。

私は閃光の輝きを見た。雷鳴の轟きを聞いた。・・・私は戦い抜けと呼びかけているイエスのみ声をも聞いた。彼は私を決して一人にはしないと約束してくださった。そしてその瞬間、私はそれまで一度も経験したことのない神のご臨在を経験した。と同時に、私の恐怖心が消えた。私の不安感が消えた。何事にも立ち向かっていける心になっていた」。

私たちは、キング牧師の祈りの中に、祈りの本質を見ることができずし、黒人教会の信仰を見出すことができます。それは、神と直接的に対話することであり、祈りによって神から勇氣と力が与えられるということです。黒人たちは、長い奴隷制の時代に、アフリカの名前を奪われ、言葉を奪われ、文化を奪われ、家族を奪われ、すべてのものを奪われていました。しかしそのような中であっても、神への信頼と信仰を保持し続けました。それは、心の中にあつて、誰も奪い取ることができないものでした。黒人たちは、神への祈りの中に勇氣と力の源泉があることを知っていました。

五 黒人教会の信仰

黒人たちにとって、アフリカの大地から引き離されて以来、信仰と教会が彼らの心の拠り所でした。モンゴメリのバス・ボイコット運動やその後の差別撤廃運動の展開を考える上で、黒人教会の存在を無視することはできません。実際のところ、教会しか黒人たちが安心して身を寄せ、社会的な運動を形成することができる基盤はありませんでした。差別的な法律がまかり通っていた社会の中で、裁判官や弁護士など法律関係者はみな白人でした。政治家も白人、高学歴の人々も白人、経済界を牛耳っている人々も白人でした。社会の主要ポストはすべて白人が握っていました。そのような中で黒人たちが自由と平等を求めることはおよそ不可能でした。「チエンジ」を求める社会的な手立ては全くありませんでした。白人の教会は人種差別を当然視していました。とくに日曜日の礼拝は人種隔離の現実を最も鮮明に映し出す時間帯となっていました。白人は白人の教会で礼拝し、仮に黒人が出席した場合には礼拝堂の後ろや二階にしか座ることができませんでした。

黒人教会では、人種差別が神の意志に反する不正義であることが当初から認識されていました。自由と正義を求める熱い思いは、黒人教会の中で脈々と受け継がれました。神が、イエス・キリストが、聖霊が、聖書が、黒人霊歌と呼ばれる讚美歌が、そして魂の奥底からの祈りが、勇氣と力の源泉となつて、生きる希望を与え続けました。黒人教会は、黒人たちが白人による差別から、たとえ日曜日だけの短い時間であつたとしても、自由にされて本当に魂が安らぐこと

のできる唯一の場所となっていました。教会は命の息吹を感じ取り、神を高らかに讃美できる空間でした。だからこそ、黒人たちにとって教会に行つて礼拝することは、とても嬉しいことであり、楽しいことでした。皆さんは、黒人の人たちが体全体で楽しそうにゴスペルを歌つたり、礼拝したりしている姿をテレビや映画で見たことがあるかと思います。

六 祈ることを学ぶ

キング牧師にとつて、祈りは勇気と力の源泉でした。「キツチン・テーブルの祈り」がそのことを示しています。キング牧師はモンゴメリのバス・ボイコット運動が始まつて、暗殺されるまでの十三年間に、いったい何度祈つていたことでしょうか。私たちも祈りによつて、キング牧師と同じように勇気と力を得ることができます。しかしそのためには、私たちも「あの方に語りかけること」が大事です。四国学院の皆さんには、「道なき所に道をお作りになるその方」に語りかけながら、これから将来の道のりを切り開いていってほしいと思います。

【祈祷】

お祈りします。神様、あなたは私たちが心から祈る時、私たちの祈りを聞き取ってくださいます。学生一人一人の心からの祈りをお聞きください、勇気と力と希望を与えてください。あなたに祈ることによつて勇気と力を与えられて、十字架への苦難の道を進んで行かれたイエス・キリストによつて祈ります。アーメン。